

## 組織目標評価報告書（平成21年度）

部局名： 地球物質科学研究センター

	組織目標	達成状況(成果)
教 育	地球物質科学専攻(博士後期課程)を発展的に改組し、平成21年度に地球惑星物質科学専攻(一貫制博士課程)を設置予定であり、当専攻において、優秀な学生の確保、必要な教育体制、学生の評価システム、教育研究環境を整備していく。	5年一貫制博士課程の独立専攻「地球惑星物質科学専攻」の連携講座に米国カーネギー研究機構地球物理学研究所の主任研究員を参画させて新専攻の大学院教育を開始した。平成21年度は、入学定員4人に対し、6人の入学者があった。また、受入れ学生については、平成21年度末現在、延べ16人(うち外国人学生14人)を受け入れている。 併せて、従来のとおり機動的に学生のサポートができるようにし、すべての講義等については、英語のみにより実施するとともに、留学生に対し、スタッフによる日本語教育を実施して、生活上の支援を行っている。 また、国際研究・教育の推進等を目的として、国内外から修士課程以下の学生を対象に最先端プロジェクトに参加する機会を設けるために実施している「三朝国際インターンシッププログラム」において10人程度を国際公募して実施した。平成21年度は、19か国から63人の応募があり、10人(うち5か国からの外国人学生9人)を採択して、最先端教育研究プロジェクトに参加させた。 このことは、国際教育研究拠点としての実績が関連分野の研究者に認知されていることを示している。
		達成度: 4 (3) 2 1
研 究	21世紀COEプログラム「固体地球科学の国際拠点形成」に採択された実績を踏まえ、かつ、特別教育研究経費として措置された「地球の起源・進化・ダイナミクスに関する国際共同研究拠点の形成」の趣旨に沿って、次の事項を実施する。 ①引き続き、国際トップレベルの拠点形成の推進のため、国際共同研究、国内共同研究を推進する。 ②カーネギー研究機構地球物理学研究所と連携して、有機地球惑星化学を共同で実施する。また、これまでに開発・応用してきたすべての分析法を統合し、「総合地球惑星物質化学分析システム」として確立する。	当センターにおけるこれまで蓄積された実績を踏まえ、平成21年度は44編の論文発表を行い、現在、国内共同研究56件、国際共同研究26件を数えており、拠点形成に向けて順調に推移している。 おつて、国際コミュニティからの国際共同研究に対する期待の増大と併せ、全国共同利用施設としての役割から、教育・研究活動を一層効果的、効率的に遂行できる体制を整備する方策として、平成20年度から、当センター独自の制度として、博士の学位を有する者で、当センターにおける当該分野の研究内容が理解でき、かつ、機器の管理、基本的な分析・実験の指導に関し優れた識見を有する者をスーパーテクニシャンとして採用することとした。なお、平成21年度は、7人(延べ人数)を採用している。 一方、平成21年度の研究員の招聘状況は、現在、国内から80人、国外から26人となっており、外国人研究員の雇用状況は、1人(延べ人数)を採用しており、外国人研究員等を参画させることにより、基礎研究分野における国際共同研究を継続して実施している。 これまでに確立した「下部マントル探査システム」と既存の高圧高温実験設備とを組み合わせ、「総合的超高压物質物性解析システム」を開発している。さらに、カーネギー研究機構やオックスフォード大学から研究者を招へいし、ケイ酸塩メルトの構造や水と鉱物との界面反応などに関する共同研究を実施した。
		達成度: 4 (3) 2 1
セ ン タ ー 業 務	グローバルCOEプログラムの採択を目指し、引き続き、教育研究拠点の形成を目指す。	平成21年度のグローバルCOEプログラムに当センターが「天地人系物質科学の創成」を立案し申請したが、不採択であった。 なお、文部科学省の「共同利用・共同研究拠点」制度に申請し、これまでの実績と将来構想が認められ、平成22年度から「地球・惑星物質科学研究拠点」として採択された。
		達成度: 4 (3) 2 1
社 会 貢 献	該当なし	
		達成度: 4 3 2 1

【自己評価総括記述欄】※目標及び指標の達成状況について総括し、次年度に向けた改善点等を記載してください。

【達成度】4:非常に優れている 3:良好である 2:概ね良好であるが改善の余地あり 1:不十分であり改善を要する

注)本様式は一般的な学部・研究科用であり、部局の特性に合わせて設定した領域・指標により修正してください。

[組織目標一覧へ](#)